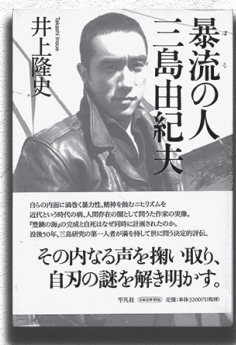


李 澈



井上隆史著
^{ぼる}暴流の人 三島由紀夫
 平凡社、2020年

三島由紀夫をその全体像において評価することは難しい。肉体を追い越した早熟な精神、多彩な作品世界、そして世間を驚愕させた自決、いずれも謎に満ちている。そのため、これまでも評伝や関係者による回想録が多く書かれてきた。没後50年という節目の年に出版された評伝である本書は、三島の生涯に対して順を追って事実を列挙するだけではなく、創作ノートや書簡、対談などの周辺資料を大量に取り入れ、また関係者への取材を重ねながら、三島文学を規定する、存在を破壊する凄まじい「虚無」と、性と死の暴力的融合すなわち「セバスチャン・コンプレックス」を抽出して、これらが習作期からすでに萌芽していたことを、実際の作品に即して論述する。また著者は、三島の創作を貫く第三の軸として、ヨーロッパの文学を視野に入れながら、「全体小説」という創作理念にも光を当てる。

本書は三島の生涯を三部構成で辿っている。特に、出生から『仮面の告白』(1949)で文壇デビューを果たすまでの動向を、綿密に追跡した第I部におけるいくつかの指摘が興味深い。「詩を書く少年」の時期を経て、自分の詩作は自身の内面宇宙の焦点から有意的にかけ離れたところで創られている「ニセモノ」であると自覚し、詩から小説に乗り換えようとした三島は、三段階に渡る習作期の中で、初めて自身の内面宇宙に向かって、虚無とセバスチャン・コンプレックスが堰を超えてあふれ出る危険を感じた。そのような存在解体の危機に直面した三島は、一旦自身の内面宇宙を小説の主題とすることを諦め、恋愛心理小説という枠組みで自身を統御することを試みる。著者によると、「全体小説」という枠組みで捉えるならば、その到達点となるのは晩年の『豊饒の海』であるが、実際、「花ざかりの森」前後の習作期の作品においても、すでにワイルド、ラディゲ、ジョイス、ブルースト、リルケなどのヨーロッパ作家の影響が見られるという。さらに、ブルーストやリルケから大きな影響を受けた堀辰雄が、三島の文学創作を導いたと、本書では論じられている。

また、東京大空襲前後に書かれた「二千六百五年に於ける詩論」への言及も注目に値する。著者は、『豊饒の海』まで貫かれる三島独自の輪廻観念を同論に見出すほか、同時期の詩作「夜告げ鳥」に、日本浪漫派の憧憬的な姿勢を否定する世界観を読み込んでいる。三島は日本浪漫派を代表する文芸誌『文藝文化』に「花ざかりの森」を発表し、小説家としての出発を果たした。この作品は、日本浪漫派の古典への回帰という文脈の延長線上に位置づけることができ、日本浪漫派の作風が色濃く反映されていたとされている。従来、三島と日本浪漫派の関係を論じる際には、このような文脈から捉えられることが多く、この作品も三島の十代の代表作と見なされてきた。しかし、著者はここに、むしろ敗戦前後に三島が同派を離脱することの内的な必然性を見出すのである。

更に、著者は、『仮面の告白』誕生前夜に、戦後の日本社会に起こった実質的变化に言及しながら、三島が、時代に対して感じる苦悩と焦燥にどうやって向き合うべきか、小説を通じて何をどのように表現すべきかを自分に問い続けたと指摘する。そして、『仮面の告白』において三島は、「虚無」と「セバスチャン・コンプレックス」を言葉によって形象化し、内面宇宙が現実世界に氾濫して制御不能になる危機を避けながら、「私」というアイデンティティーに亀裂を走らせると同時に、戦後民主主義における日本人のアイデンティティーの不在という真実への痛烈な批判を行ったと論じられる。つまり、この点において、まだ意識的ではないにせよ、三島は、社会や時代、歴史の全貌にまで射程を伸ばすことで、「全体小説」的な問題提起を行っていたと捉えることができる。これはその後の三島の創作にとって重要な意味をもつ。

第Ⅱ部では、『仮面の告白』以後、『豊饒の海』が書かれる前までの三島の実人生と創作の動向がつぶさに辿られる。ここで注目すべきは、第Ⅱ部からの論述では、三島の代表作を検討する際に、常に「全体小説」という概念がひそかな核心として据えられていることだ。それに伴って、本書での三島文学の評価においては、その「世界文学」としての位置に注意が払われる。これは本書の特色の一つでもある。例えば著者は、創作ノートの内容を踏まえて、『禁色』の創作におけるジョイスの影響を見出している。本書によると、三島は、『ユリシーズ』に刺激され、作品と人体模式図を対応させた可能性が考えられるという。加えて著者は、ジョイスがダブリンという都市を描くときに目指した、部分を描きながらも時代や社会の全貌、世界の本質を全面的に捉えるような志向に、三島が影響を受けたと指摘し、それが三島が『禁色』の執筆中に見据えた方向となり、さらには、『豊饒の海』まで影響を及ぼしているという見通しを立てている。また、現実の事件に取材し、かつ作者自身の経験を組み込みつつも、完成した作品が、素材となった事件や作者個人の体験を超えて、社会、時代、歴史の全貌を捉え、これを挑発するものとなっているという点において、『金閣寺』と『ボヴァリー夫人』の共通点が見出される。ブルジョワ社会の凡庸さを把握したうえでそれを切り捨てようとするフローバールの問題意識に三島は共鳴したのだと、著者は指摘する。これらの指摘については今後、翻訳とその受容の問題を考えた上でさらなる分析が必要と思われる。ほかにも第Ⅱ部では、『美しい星』、「恋の帆影」、『絹と明察』におけるニヒリズムの傾向に注目し、この三作品にハイデガー哲学の影響を見て取り、ハイデガー哲学に基づいて虚無を構造的に形象化し、社会、時代、歴史の全貌を捉えようとする三島の試みに光が当てられる。この試みは、「全体小説」の骨子となる哲学を探し求め、時代を乗り越えようと新たな

方法論の提起を目論んだ三島の創作の軌跡を浮き彫りにしている。

第Ⅲ部において、本書の論述を陰で支えてきた「全体小説」の理念に光が当てられ、『豊饒の海』についての考察が繰り広げられる。そこで三島が目標としたのは、世界を解釈し、新たな方法論とヴィジョンを提示することができるような作品である。その背後には哲学が控えていなければならなかった。そして、その哲学として選定されたのが唯識論であったと、著者は指摘している。なお、「全体小説」という概念は、三島が生きた時代には、厳格な定義に従って用いられてはいなかった。しかし、本書において、日本の近代文学史における私小説論争の中で、私小説に対抗する本格小説として俎上に上がった横光利一の『上海』がその一つの実践として位置付けられ、さらに三島と同じく『序曲』同人である野間宏の『青年の環』がその先駆的形態と見なされている点はとても興味深い。この指摘は、三島と戦後派の関係を検討する上で有益な示唆を与えている。一方、その壮絶な自死に至る動機に、決起の檄文や講演などではなく、遺した作品群から迫るといふ本書の方法論は、一見するとやや遠回りなようにも思えるが、実際は、檄文や講演を通じて彼が世間に残した多面的な印象よりも、すべて実体験を基にしているとされる小説や戯曲などの作品に着目した方が、より思想の変遷を追跡しやすいということだろう。戦後日本を蝕む欺瞞に直面した挫折や価値観の崩壊を超克するには、「二千六百五年に於ける詩論」における、戦争末期の激しい空襲下で経験し獲得した世界観が、唯識論と唱和し、「生は刹那ごとに切断され、時空は瞬間ごとに分断・非連続化されることによって、はじめて生は永続性と連続性を保証されるのだ」とする時間論こそが必要なのだと三島は得心したがゆえに、あのような最期を選んだのだと本書は示している。

本書は三島由紀夫を「世界文学」の一角に位置付ける優れたモノグラフであり、また、巨視的な観点から三島と時代の関係を考える上で重要な示唆を与えている。三島研究者にとって必読の一冊である。